



星空を 見上げたら

作者 工藤 拓也



あれは、小さいころ、確かく小学校中学年くらいのころだった。それは、どこまでも、輝いていて、とても、きれいだった。夏休みの課題研究で、クラスの友達と外で見た光景は、今でも、忘れない。友達と話をしたことで覚えているのは、「この光の数だけ、未来がある。なら、またいつか、出会える未来を」

こんなことしか覚えていない。それなら、この言葉を胸に、俺は、またいつか、出会える日を待ってしよう。小さいころに約束した、茶髪気味の少女と再開するために……

5月下旬の頃

「めんどい、五月病というのは、この事か」

五月、俺こと、伊条院・直人は、公立高校に通っている。実際、地元から近い高校が、公立であっただけで、別に頭がいつちやっているから、田舎の高校になったわけではない。

「何、いつているんだよ直人、お前がそんなこと言うなんて、珍しいな」

こいつは、中学のときに、都会から、転校して来た、石野・潤で、以外に腐れ縁らしく、クラスは、同じ。席も近い。意外と困り者だ。というか、珍しいというのは、何なんだ。俺がめんどくさがらないとでも、思っているのか？

「と、その前に、直人、今日、転校生が来るのは、知っていたかい？」

へえー、転校生が来るのか、意外だな、どんなやつだろう、気になるね。

「知らないけど、それで？」

気になったら、とことん深くやる。自分の知らないことでも、知っていることでも、本気で取り組むのが、自分なんで、

「それでなく、そいつが・・・やべつ、チャイム。まあ、自己紹介のときに分かると思うよ」
はっ？いいところで、中断するなよなく、余計に、気になるだろう

「全員に大事な知らせがある。このクラスに転校生がきた。入れ、自己紹介でも、してくれ」
黒髪ロングなのだが、活発なイメージのある女子が教壇に上がった。

「始めまして、桐島・喬と、言います。趣味は、天体観測です。短い間になりますが、よろしくお願ひします」

これは、気になっていたことが、全部解決したなく。それにしても、趣味が天体観測とはラッキー

「ええ、桐島は、親の都合での天候のため、夏休みまでの短い間だが、仲良くしてやってくれな。それじゃあ、席だが、直人、あいつの隣の席に座ってくれ」

何なら、部員補充のために天体部にでも、て、俺の隣ですか、なんと言ふことだ、これは、俺に彼女を誘えども、いいや、違う、これは、星が俺にプレゼントしてくれたのだろう。絶対にそうだろう。

「これでホームルームが終わる。解散」

よし、誘おう。今なら、話しかけられる！

それから、しばらくして

放課後

くそ、今日一日の中で一度も話せなかった、明日こそは・・・

「ねえ、その君、天体部まで、案内してくれないかな」

良いよ良いよ。あれ、桐島？天体部に！？やった、これでよし。

「良いよ、俺の名前は直人、天体部部長だから、よろしく、桐島さん」

天体部の部室は、屋上にあるが、実のところ、天体望遠鏡以外は、泊まれるようになっていたためか、別名、便利部屋とも揶揄される。

「ここが、天体部だよ、部員が俺を含めて三人しかいないけど、ゆっくりして行ってね」

桐島さんは、天体室に入ると、望遠鏡を見たり、活動発表などを見ている。

「潤、令名、お客さんだよ。顔を出して、紹介して」

よし、全員集まったね。

「副部長の潤、石野・潤、よろしくね喬さん」

桐島さんは、優しく、返答した。

「部員の、夜朝・黎明。入部するなら一応よろしく」

おいっ、黎明、その反応は、何なんだ、実のところ、女子部員がほしいといったのは、お前だろ、もうちよつと嬉しそうにしろよな。

「というわけだ。俺は、星の観察。潤は、衛星について。黎明は、太陽について。自由に活動している」

ざっと説明すると、桐島さんは、手を上げた。

「それじゃあ、私、入部したいのだけど、良い？」

えっ！本当に！それじゃあ、部員が増えるのか。良かったー

「じゃあ、入部届けと調べることを書いてくれないかな」

聞いてみると、桐島さんは、良いよ、というなり、すぐに書類に書いてくれた。

「それじゃあ、早速、活動してくれ。ええと、桐島さんは、星について調べるようだし、このパソコンとあの天体望遠鏡を使ってくれ」

俺が指差した方向の方を、桐島さんは、見て、向かった。途中で、振り向くと

「ありがとう。後、名前で呼んでくれない？」

お礼を言われたけど、怒られた。しようがないか、さて部活動に移りますか。今日は、見えるかな、天の川。

カタッ、カタカタカタカタカタカタカタタタ、カタカタカタッ、

もう7時か、今日は、終わるか

「全員、今日は終わるぞ。パソコンの電源切っていけよ。各自、帰宅していけよ」

戸締りと器具の片づけをして、よし、OK。後は、天文室の扉に鍵を掛けて、さてと、職員室に返却しますか。あれ？桐島さ・・喬さん、どうしたんだろう？

「喬さん、なんかしたか？」

喬さんは、驚いたように、こちらを向き、夜の空に指を差して

「星空を見ていたの、何か、昔に戻れるような気がしてね。後、さん付けもやめて。あなたはどうして？」

また、怒られたよ。別にね、辛気臭くしたかったわけでもないんだけどね。

「顧問に、鍵を返すついでに、入部届けを渡すんだけど。あと、俺が、喬と呼ぶ代わりに、喬は、俺のことを、直人と呼べよ」

自分は、名前で呼ぶのに、相手が呼ぶときに、名前じゃないのは、ヤダからな
「いいよ。それじゃあ、私も付いて行く。別にいいよね。直人」

はあ、めんどい、別にいいか。

「それじゃあ、行きますか、喬」

職員室に向かって、歩き出すと、喬は、返事をして、横に並んで、付いてくる。

カツ、カツカツコ、カツコツカツコツカツコツカツコツカツコ

職員室のある2階に着くと、丁度、顧問の先生が、職員室から出てきた。

「おつ、先生、かぎ返しに着ましたよ。後、新入部員もですが」

顧問の先生は、目を輝かせると、こちらに飛びついてきた。

「伊条院、それは、真実か、なんと、転校生の桐島君か、顧問の、平坂・公彦だ。よろしく
喬は、丁寧に返事をするよ、先生は、鍵を受け取り、足早に去っていた。

「いつもながら、元気だなく、平坂先生は、こつちが、振り回されているよ」
本当に困るな。生徒が先生を振り回すのに、先生が生徒を振り回すなよな。

「帰ろうか？もう、遅いし、行こうよ」
そうだな、さつさと帰りますか。

外に出て、自転車を押していくと、喬も、ついてくる。あれ？こいつ、家に帰らないつもり
なのか？

「そういえば、喬の家は、どこにあるんだ？俺と同じ方向にでも、あるのか」
このまんま、て、わけにもいかねえし、どうするんだ。

「そうねえ、多分、直人の家の隣だった気がするけど」
へえ、意外、俺の家の隣手、ことなら、ご近所さんだったのか、知らなかったな

「そういえば、気になっていたのだけど、直人は、どうして、星を見ているの？」
それは、何でなんだろうな、昔の影響か？いつものように、あいつ、と今日みたいな夜の日

に空を見上げているうちに、
「多分、見せられていたんだと思う。幼い頃から、俺は、あいつ、と一緒に星空を見上げて

いたときから、ずっと」

なんか、恥ずかしいな、小学校からとか、馬鹿みたいだな

「へえ、いいね。あいつが気になるけど」

はっ！？別にいいだろう、恥ずかしいし、

「まあ、関係ないだろ。お前は、どうしてなんだ？」

逆に質問すると、少し考える素振りをして、顔を上げて

「私も、直人と同じかな、でも、一番の理由は、私の好きな人との約束があるからかな」

ふん、俺と似たような感じなんだな。

「そうか、いいな。おっと、話をしていたらついちゃったな、しかし、本当に隣だったとは、

驚きだな、何でわかった？」

素直に聞いてみたいし、転校初日で、俺の隣で、俺が隣の家の人なんて、わかるものなのか？

「それは、ひ・み・つ、だよ」

なっ！こいつ、手品のタネを教えてくれないのか！なんて、いじわるなやつだ。

「まあいい、それじゃ、また明日な」

別れの挨拶をすると、番は、手を振り、

「うん、それじゃ、また明日ね」

家に入り、部屋に行くと、ベッドに倒れこみ、考える。

あいつ、に似ているなとふつと思つた。

7月下旬の頃

あれから、もう、2ヶ月もの時間が流れた。

毎日、話し合い、口論したりと、さまざまなことをしてきたが、それも、今日で、終わりか。

「めんどい、だるい」

また、待ち続ける日々に戻る、そう考えただけで、ひどくつまらないと感じる。

「珍しいね、直人が、めんどい、なんてね」

またか、ひどく誤解されがちだが、俺は、別に、思ったことを口にはしているだけだ。それなのに、何で、珍しく見られるんだ？

「悪いな、こういう性分なんだ。それと、今日は、番にとって最後の部活動になるんだから、祝ってやりたいんだが、いいか？」

どうせなら、派手にパーティでも、と思っていたけどな、

「え！？本当に！？ありがとう、何やるの？」

一種のサプライズのつもりだったのに、ハードルがあがりそうだな。釘でも打っておくべきだよな？これ以上、ハードルが高くなると、潤と黎明が困るだろうし

「おい、あんまり期待するなよ、ハードルが高くなるからよ」

どうせなら、潤と黎明が困っているところを見るのも、よかつたかな？

「うん。それじゃあ、行こう直人、二人とも待っているでしょう。早く。行こ？」

はああ、まったく、困り者だよ、喬は。そう、目を輝かせなくても、行くよ。

「わかつたから、そんなに楽しみなら、待つてろ、今行くから」

ふう、これでいいか。行くか。

カッコツカッコツカッコツカッコツカ、カッカカカッカッコツカ

天文室の前についた。深呼吸して、扉をゆっくりと開く、待ちわびていた喬が、先に入ると、突然、クラツカー音が、鳴り響く。おそらく、潤と黎明が、サプライズパーティーの感じで、やったのだろうけど、今の時点では、最悪だ。こいつなら、すぐにでも・・・どうした？何で、静かになっているんだ？

「ううう、ううううううううう」

え！何だ、どうした？何で、泣いているんだ？俺か、潤か、どうしたんだ？

「ううううううう、ありがとう、皆、わたちのためにこんなにしてくれて、ありがとう」
泣くなよ、なんか、俺らが悪いことしたみたいじゃねえか、くそ、どうすれば・・・

「喬ちゃん、泣かないで、今は、楽しくパーティーするのが、一番だと思うよ」
ナイスだ。潤、さすがだぜ。

「ありがとう、そうだよ、楽しもう。皆で」

しばらくして、パーティーは、終わり、一人ずつ、喬に、手作りのプレゼントを渡した。潤は、月光石を用いた、小さな立体模型を。令名は、白夜のスケッチを。俺は、ロケットペンダントを。渡した。その後は、帰宅することになり、帰宅した。家について、飯を食い、風呂に入った後、寝ようとしたが、なかなか寝られず、深夜に、思い出深い公園に行くと、ひとり、ブランコに乗って、夜空を見上げる喬が居た。よっぼど、物思いにふけているのか、こちらに気づかずに、夜空を見ている。

「どうした、喬、こんな夜中に、一人ブランコなんかして」

喬は、びくつ、と反応して、こちらに振り向く

「直人か、実は、昔を思い出して、寝られないから」

ふうん、そうか、俺と、また同じなのか、

「直人は、こんなところにどうして？」

やっぱり、返してきたか、そうだな、こいつになら、別にいいよな。

「一つ、昔話を聞かないか」

自分の過去のこと、すべてを、こいつ、喬に話しても、いい気がする。

「うん、いいよ、私も、暇だったから、聞くよ？」

そうか、初めてだな、このことを、ほかの誰かに話すのは。

「昔といつても、小学生のころ。ちようど、夏休みの最初の日に、三人の友達と、課題研究の星空スケッチで、この公園に集まったんだけど、そのときに、俺らは、初めて、星空を見て、きれいと思ったんだ。したら、友達の女子が、この光の数だけ、未来がある。なら、またいつか、出会える未来を、思ってた。そのときは、そうだな、それがいいな、と思っていた。でもな、もう、その夢は、かなわない。その女子以外の友達は、交通事故とかで、全員、死んでいった。俺は、せめて、あいつらのためにも、待ってしよう、待ち続けようと思っていたけど、ついに、来なさそうだ。卒業式まで、後、半年しかないのに！来るわけがない。というわけだ。」

「ごめん、ちよつと、おかしいだろうな、こんなことをいきなり言われても、困るだけだろうな、忘れてもらったほうが・・・良いかもしれない

「ごめん、今のちよつと、忘れてくれ・・・」

「ちよつと、待って！」

へっ、どうした？

「もしかしたら、それ。私かもしれない。茶髪気味、じゃなかったかな？」

確かにそうだけど、まさか、喬が、あの少女！俺のずっと、待ち続けた人とも言うのか？
「それなら、何で、教えてくれなかった！」

つい、怒り気味な口調になってしまった。

「わからなかったのよ！直人が、こんなに、変わっていたのだもの！」

そうか、こんなに身長が伸びているもんな、わからないよな。

「ごめん」

素直に、頭を下げて、謝ると、喬も、頭を下げて、

「私のほうこそ、ごめんね、何年間も、待たせてね。ほかの二人は、居なくても、私たちは、また会えた。それだけでも、今なら、とつてもうれしい」

そうだな、俺も、今は、それだけでも、この一瞬だけでも、うれしく感じる。

「ねえ、ケータイ番号、交換しよ。たとえ、遠く離れていても、繋がっていられるように」
不思議だな、喬といると、俺も、元氣づけられる気がするし、心が落ち着く。

「良いよ。それと、ありがとうな、今日は、ゆつくりと寝れるよ」

ケータイ番号を交換して、手をつないで、ゆつくりと、帰った。

「ふうっ」

部屋に戻り、ベッドに倒れこみ、仰向けになって、天井を見上げる。まだ、手にぬくもりを感じる。そして、俺は、ゆつくりと、眠りに落ちた。

次の日、桐嶋・喬は、転校して、隣の家は、空き家になった。

卒業式

喬が、転校してからも、いろいろあつたけど、それも、今日で終わりだな。

「よう、おはよう、今日で卒業だな、僕達。天体部も、廃部になるのかね」
「そうだな、たぶん、そうなるだろうよ。」

「潤は、お気楽ね。私は、正直言つて、悲しいわ」

へえ。珍しいことも、あるみたいだな。あの無口の黎明が話すとは、

「まあ、それでも、俺たちは、今日でお別れだ。またいつかは、言わなくても、逢えたら
良いな」

さりげなく言つたが、こいつらとは、またいつか、どこかは、わからなくても、逢える気がする。

「さうて、卒業式を、深々と味わいますか」

「そうだな、俺たちで、できることも、それしかないよな。」

「元気なことね」

まあまあ、そういうこと言うなよ、こいつも悲しいんだからな、

「卒業生、準備したか、それでは、行くぞ」

卒業式、今までの友人との、日々を振り返り、社会に旅立つ行事。友人との別れを惜しみ、新しい日常を送る、第一歩。それでも、俺は・・・遠くに、儂く、脆く、空しく見えた。自分にとつても、なぜかはわからないけど、いきなり涙が出てきて、我慢しようにも涙は、止まらなかった。卒業式が終わり、教室に戻っても、涙は、止まらない。

「全員、卒業おめでとう」

平坂先生も、泣いており、自分でも、わからないくらい、心が、満ち溢れていた。

「なあ、直人、今日、天体部、最後の、天体部の活動をしよう」

別に良いよ。でも、せめて、泣き止んでからにしような。

「黎明、今日、最後の部活動するから、来いよ」

黎明は、涙を拭きながら、コクリと、首を縦に振った。

「解散！」

終了後、俺らは、部室である天体室の前に来ていた。

「それじゃあ、はじめるぞ、最後の部活を」

扉を開けて、部室に入ると、夏に転校したはずの喬が、立っていた。

「久しぶりね、皆、かえって来たよ。私も卒業したし、最後に、皆で、ほしぞらスケッチをしたいなく、なんてね」

いつもながら、いい発想するんだな。

「よし、やろう、皆で、最後に、スケッチだ！」

全員、夜まで、会話して、楽しみ。スケッチが終わった後も、四人で並んで、夜空を見ていた。

「私、そろそろ、帰る」

黎明が立ち上がり、そういう。それに続いて、潤も立ち上がり

「僕も、帰りますか、黎明、一緒に帰ろう」

二人は、ゆっくりと、名残惜しそうに、学校から帰っていった。

俺も、そろそろ。帰ろうかな？立ち上がるうとすると、喬は、裾を引っ張り、止めてきた。

「もう少しだけでも。一緒にいて」

俺が、喬の隣に座ると、彼女は、体をこちらに預けてきた。

「わたしね、直人といると、胸がどきどきするの。そしてね、ずっと一緒にいたいと思うの」

そうなのか、俺は、待ち続けただけ、しかも、待ち続けただけなのにな。それでも、俺も、喬のことが・・

「おれもだよ、喬のことが、好きだよ」

照れくさいけど、返すと、

「もう少しだけ、このままで、いさせて、直人とちよつとでも、一緒にいたい」

喬は、瞳を閉じると、静かに眠っていった。寝息を立て、寝る喬は、あのときのままだった。

ふと、星空を見上げると・・・
そこには、あの日見上げた景色が、昔の光景のまま、光り輝いていた。

これは、フィクションですが、一部、現実のもので、構成しております。
ご協力は、

らんこし作家デビュー・プロジェクト

お受けしております。

後書き。

実は、この小説を書くきっかけになったことがあるのですが、それは秘密ですけれど、ストーリーの構成になった曲があります。興味のある方は、どうぞ、下手な歌詞ですが、自分で作った最高に良い？曲です。テンポ、その他、もろもろ、自由なので、歌っていただけたりしたら、幸いです。

曲名・星空（読み方は、自由です。）

いつかの日々に 思い馳せるたび、僕の心を 縛りつけるもの それは 見えなくなっ
てしまっただけ 僕の心を 輝かせる

色のない日々に 落ちて来る星 いつまでも どこまでも 待ち続けた星
僕の目には 映らないとしても 君に逢えたことを ところで 感じた

夜空に咲き誇る 光 星空、きつと、この出会いに 輝きを増す

君がいなくても なんていわない
ずっと、ずっと、君のそばで ひかりかがやく
あの日々

星空を見上げたら

2014年8月1日 発行

著者 工藤 拓也

発行者 工藤 拓也

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Takuya Kudo 2014

